

難民救援情報誌

Trial & Error

トライアル・アンド・エラー

—試行錯誤—
No.37



レントゲンフィルム読影中のロドリゴ医師(中央)と林医師(右)。撮影 小林正典

X線チーム国境を行く

——林 達雄医師に聞く

JVCの「X線チーム」が、タイ・カンボジア国境の難民村、タイ被災村での診療活動を始めて、2年めを迎えた。現在、活動のさらなる充実・拡大をはかっているが、将来はどのような形にすべきかを検討する時期にもきている。

チームの一員として、6カ月の活動を終え帰国された、林達夫医師（外科）に現状をうかがった。（文責・編集部）

— X線チームの1日の行動は？

林医師：水曜日を例にあげてみましょう。

活動時間は、タイ軍最高司令部や国連機関との申し合わせで、朝8時から夕方5時までです。

私たちの足は2台の四輪駆動車で、1台に発電機とX線撮影機材、もう1台に現像装置を積んでいます。この2台に分乗して、朝、アランヤプラテートの宿舎を出発します。

メンバーは、チーム調整員の金子一弘さん。フィリピン人医師のロドリゴ先生、タイ人でレントゲン技師のクリアクライさん、タイ人ドライバー兼助手のスラさん、そして私の計5人です。

難民村まで、いくつもの検問を通らなければなりません。自動小銃を肩にかけたカーキー色のタイ軍兵士、国境に沿って掘られた戦車壕からカンボジアに向けられた銃口……、さすがに緊張します。

Trial & Error 37号目次

ソマリアの大地から(アフリカ).....	4p
本当に有効な援助とは.....	8p

午前中ドン・ラック、午後はバンサンゲーという難民村を回りますが、事前に無線で安全を確かめてから村に入ります。

カンボジア人の難民村であるバンサンゲーでは、2つある外国民間団体の病院のひとつに行きます。その病院の医師の注文に応じて、JVCチームは、結



タブラヤ郡病院の巡回診療

JVCのX線写真は役立っています。

患者のどの部位を撮影するかは、ロドリゴ先生が指示するのですが、胸部など比較的簡単な部位は、クリアンさんの指導で、カンボジア人ワーカーや助手のスラさんが撮影します。むずかしい部位の撮影と、フィルムの実像はクリアンさん自身の担当です。—どんな患者さんが多いのですか？

林医師：当初は、戦争による負傷、たとえば、地雷や銃弾が体内に残っているケースが多かったのですが、最近では結核、およびその疑いのある患者の割合が増え、全体の20パーセントに達しています。

必要最小限から最大限の効力を生み出すボランティアの技量

—メンバーはどんな方ですか？

林医師：まず、レントゲン技師のクリアンクライさん(26歳)から。彼はタイ人で、昨年の9月から参加しています。タイのマヒドン医科大学の出身で技術は申し分ありません。彼の加入のおかげで、撮影可能な部位が大幅に増えました。

核、肺炎、外傷などの患者さんを、撮影するわけです。

また、1週間に1度、カオイダンにある赤十字国際委員会の病院から、外科医がこの病院に来ます。外科医は手術の必要な患者や重症者を、カオイダンに移送しますが、そのときの診療のためにも、

こんなエピソードがあります、昨年11月に、バンコクでアジア・オセアニア放射線学会が開かれていることを知り、急ぎょ、会場の一角で、我々のチームが撮影したフィルムを展示させてもらいました。ご覧になった方は、「よくこんな簡素な機械で、これだけの写真が……。」と驚いておられました。

次に、昨年8月からチームの一員となった、フィリピン人のロドリゴ先生(63歳)ですが、フィリピンの大学を卒業後、軍関係の病院に20年勤められた外科医です。その間、世界各地で経験を積まれているので、頼れる先輩、尊敬すべき父親のような存在です。なかなか精力的で、他の外国人の医師たちとも積極的に話し合いの場をもっておられます。

酒、タバコをたしなまず、夜10時には必ず就寝、朝3時から5時までは勉強と、医師のカガミのような方で、私などがタバコを吸ってますと、私の耳の穴にタバコを突っ込みながら、「やめたほうがいいよ。」と耳の痛い忠告をしてくれます。

また彼は美食家でもあって、手料理をごちそうになることがあります。ある日、仕事を終えて帰宅する途中、鴨を下げたタイのおばさんに会いました。ロドリゴ先生は自ら交渉して買い求め、宿舎で料理してくれました。なかなか、うまかったですよ。

国民性というのか、とにかく陽気な方で、オーバーな表現やユーモアあふれる冗談で、皆を笑わせます。一度、バッタの大群を見て、「あれはJVCのヘリコプターだ。」と言われ、みんなで大笑いしました。—難民村で活動する他の団体との関係は？

林医師：活動する諸団体の医療関係者は、WFP/UNBRO*¹が召集する隔週の会議に出席します。この会議では、全体的な調整、意見、情報の交換がなされます。さて実際の活動としては、4つの民間団体と赤十字国際委員会の医療チームに撮影したフィルムを提供しています。また、タイの地方病院のチームと、被災村と一緒に回り、X線の撮影だけでなく、直接診療も行ってます。

私たちが協力している団体のひとつ、ノンサメット難民村に入っているARC*²を紹介しましょう。

この組織は、

車の熱気でフィルム乾燥
クリアンクライさん(左)とスラさん



内科、小児科、産科、そして国境では唯一の外科の4つの病棟、さらに結核患者病棟、病原菌の検査室などを持っています。そのうえ、国境の難民村であるため、病院の敷地の中央に避難壕があります。

医療チームは全員アメリカ人の医師ですが、結核病棟だけは、フィジカル・アシスタントと呼ばれる準医師的な神父さんが動いています。ほかに訓練を受けたカンボジア人が、各所に配置されています。

参考になるのは、ARCの調整員が看護婦さんであることです、やはり医療チームの調整員は、医学の専門知識があるほうが、スムーズに活動できます。

彼らのために役立つ知識・技術を伝えてゆくことこそ重要

— 今後の活動の展望は？

林医師：JVCのX線チームが、X線撮影以外に、どのようなかたちで活動を広げていくか、現在、いろいろな可能性をさぐっている段階です。

たしかに、レントゲン診療をするという、初期の目標は、ある程度実現できたと思います。しかし、診療の対象が、将来は祖国に帰る、あるいは第三国に移住してゆく人たちですから、難民問題の本質的解決に役立っているわけではありません。また、仮に難民問題が解決したとしても、タイの村の現状も放置できる状態ではありません。

長期的視野に立つならば、私たちが立ち去ったあとでも、なんらかの形で、彼らのために役立つ知識技術を伝えてゆくことが、重要だと思います。

具体的には、次のふたつを考えています。ひとつはカンボジア人ワーカーに、X線写真の撮影、現像の仕方を指導すること。もうひとつは、キャンプの人々に撮影したフィルムを見せながら、どこが悪いか、どうしたら治せるかを説明し、X線医療に関する理解を深めていくことです。

また今年の2月から、タイの郡病院の地域医療プログラムにも参加しています。普通、タイの郡病院では、政府の方針で、月に1、2回農村への巡回が義務づけられていますが、実際は、看護婦が薬を配りに行く程度のようなようです。そのなかでタブラヤ郡病院は、若い院長の着任以来、村々を月に13回も巡回し、看護婦による衛生、避妊、虫歯予防の指導、医師による検診、投薬など行うようになりました。

JVCのチームも、毎週1回木曜日、月1回土曜日にこの巡回診療に参加し、X線撮影だけでなく、私たちが患者の診察にあたっています。



ARCの小児病棟（ノンサメット）

私たちが、この病院の活動に次の2つの意義を感じています。第1に教育的プログラムであること、第2に3月に1度、同じ村を訪問しますので、継続的な観察ができるということです。

— ところで、タイで活動された手ごたえは？

林医師：最初、3カ月の予定だったのですが、実状を知るには不十分であると考え、結局6カ月になりました。日本社会の狭い枠の中で働くよりは、いろいろな意味で、私個人としても、貴重な体験になりました。国境とか国とか、一見、超えられそうにない障害物はたくさんありますが、現場に飛びこんでしまうとなんとかなるものですね。

また、地域医療に関しても、日本国内という枠にとらわれず、本当に必要とされているならば、海外へ飛んでいってほしいですね。

— 今後のご予定は？

林医師：今年の4月から9月末まで、タイのマヒドン大学で熱帯医療のコースを受けます。これは、これまでやってきたことの延長にしかすぎませんが、今後、こうした医療活動を続けていく上で、何らかの役に立てば、と思います。

— 今後の、より一層のご活躍を期待しています。

* 1. 国連の一機関で、タイ・カンボジア国境で活動している諸団体のいわば“まとめ役”であり、かつ活動資金の一部を出資している。

(World Food Program/United Nations Border Relief Operation)

* 2. アメリカン・レフュジー・コミティ。'79年に設立された民間団体で、アメリカに定住するインドシナ難民を援助するだけでなく、タイの難民キャンプ、難民村へ医療チームを派遣している。

・「緊急事態」が発生した場合には、迅速かつ柔軟に救援活動を行えるような、民間の医療チームが必要である。JVCでは、その第一段階として、昨年11月に「X線移動診療プロジェクト」を発足させ、現在に至っている。



ソマリアの大地から——難民キャンプレポート

柴田 久史

ソマリアの首都モガディッシュから、JVCの活動地であるルーク地区の難民キャンプまで、およそ420km。途中からは極めつけの悪路が続く。もうもうと立ちのぼる砂ぼこり……。

日本人は10名しかいない国ソマリア

1983年8月19日、私は首都モガディッシュから、420km離れた難民キャンプ・ルークにむかった。首都の効外にぬけると、たちまち眼の前に果てしない大地が広がり、高さ3mのアカシアの木が点在しているだけである。舗装された道路のわきを、ラクダと遊牧民がゆうゆうと歩いている。

ときどき、軍のチェック・ポイントがある。ソマリアは、現在、エチオピアと紛争状態にあり、私の行く道は、そのエチオピアに続いている。

約4時間後、ソマリアで3番目に大きな町、バイドバに到着。休けいと昼食をかねて、町一番のレストランの前に車を止めた。手にボロ切れを持った子どもが、ワッと車をとりかこむ。「洗車をしてやる」と身ぶり伝える。アジア人である私の顔は珍しいらしい。好奇の眼しで私の顔を見るなり、「シノ、シノ」と呼び始めた。この国には、200人以上の中国人（中華人民共和国）の技術者が、経済援助のため、

道路工事などに従事している。ソマリアには、わずか10名ほどの日本人が滞在しているだけで、大使館も領事館もない。子どもたちが、私を中国人と間違えるのも、当然かもしれない。

距離と時間との闘い

1時間の休けいの後、出発。バイドバを出て50kmほどいくと、舗装道路がとぎれる。それからは極めつけの悪路だ。もうもうと立ちのぼる砂ぼこり。予算がなくて国連から借りた車は冷房がないため、窓を開け放して走る。車の中に砂が入り込む。頭の毛は、砂でバサバサになり、顔を指でかくと、爪はまっ黒になる。目指すルークまで、この悪路が150kmほど続く。

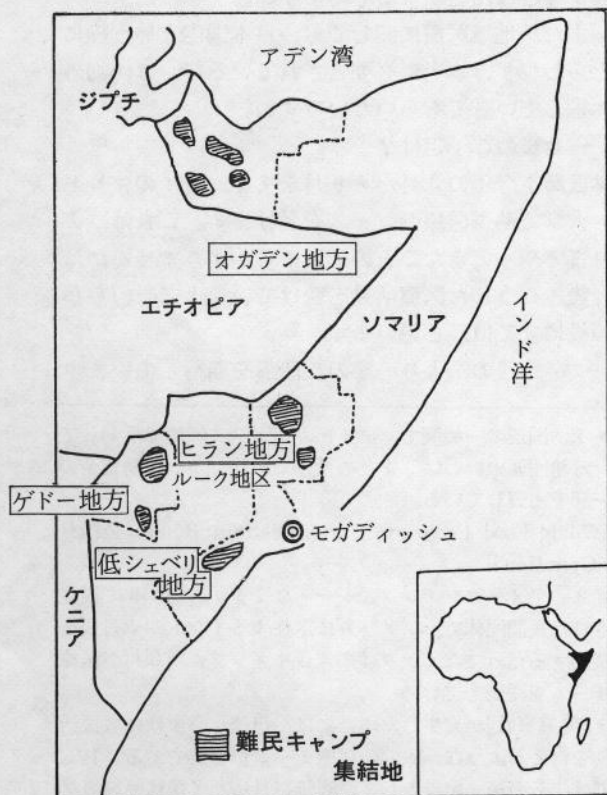
ちなみに、私たちが難民救援のために使う活動資金は、主として、UNHCR（国連難民高等弁務官事務所）から、このバイドバの銀行へ振り込まれる。私たちの活動する現場である難民キャンプから、資金を引き出しに、ここへ来るのだが、もっと遠い町までプロジェクトに必要な資材を求めて行くことがある。どうしても農場の整地に必要となり、1県に1台しかないブルドーザーを借りに行った時など、往復だけでまる一日、交渉に3か月もかかってしまった。つくづく、ソマリアでの仕事は、時間と距離との闘いだと感じさせられる。

なぜ難民が生じたのか—ソマリア問題の起源

JVCの農場のあるルーク地区の難民キャンプは、ケニア、エチオピアの両方の国境から50km、北緯4度の地点にある。年間の降雨量はわずか300mm、日中、気温は40度を越える。その過酷な自然条件の下で、難民が暮している。

1977年7月から翌年3月にかけて、ソマリア、エチオピア両国政府は、オガデン地方の領有をめぐる衝突した。いわゆる「アフリカの角」紛争である。

オガデン地方はエチオピア領ではあるが、ソマリ語を話すソマリ族の人々が放牧生活を営んでいた。民族自決をめざす西ソマリア解放戦線を支援するという形で、まずソマリア政府軍が攻撃をしかけた。これに対し、エチオピア政府軍はソ連、キューバな





どの援助を受け撃退した。現在、大規模な戦闘は起こってはいないが、ゲリラ戦は続いており、ソ連側から離れアメリカの援助をとりつけたソマリアと、エチオピアの関係は、緊迫したままである。

この武力衝突と、30年ぶりという大干ばつのために、約150万人にもものぼるソマリ族が、ソマリアの領内に流入した。当初は、多数の餓死者が出るなど危機的な様相を呈していたが、現在はUNHCR、WFPなどの援助で、緊急状態は脱したと言われている。

危機は去ったとはいえ、状況が好転したわけではない。依然として、人口400万人、国民1人の年間所得100ドルあまりという、最貧国のひとつソマリアに、75万人以上もの難民が滞在している。

彼らは、元来オガデンでは、ラクダ、ヤギ、ヒツジ、牛を飼い、そのミルクや肉を主食としていた。またオアシスからの水、あるいは生活用品の運搬には、ラクダやロバを使っていた。しかし、ほとんどすべての家畜は、戦乱と干ばつで失ってしまった。

現在のオガデン地区の状況では難民問題の第一の解決法、本国自主帰還がスムーズに実現するとは思われない。また、第三国定住の可能性も、ほとんどない。この2点が、インドシナ難民と根本的に違っているところである。

つまり、一口に言えば、75万人もの人間が、生産手段もなく、国際機関などの援助だけで生活しているのが現状なのである。

水とたき木を運ぶ女性と子どもたち

現在、ルーク地区の難民キャンプでは、10日に1回、1人2kgのトウモロコシやキビと400gの粉ミルク、ときには砂糖、食塩、食用油などが配給されているが、難民の仕事は生活用水と燃料の確保だ。

生活用水は、キャンプの近くを流れるジュバ川の水を浄化している。水の配給は、午前7時から正午、午後3時から6時まで行なわれる。しかし、給水は1万人もの難民に対して、わずか20個あまりの蛇口で行なわれるため、水道の前には、いつも長蛇の列ができる。

バケツや4ℓ入りのポリタンクを持って、自分のテントまで、2kmも3kmも歩いているのは、たいい婦人と子どもだ。なかには6歳ぐらいの子どもの姿も見られる。1日に2度も3度も往復する。

水と違い、炊事用のたき木は配給されていない。キャンプ周辺の木はとりつくされてしまい、たき木に

使えるような木はまったくない。ある者は共同で車を借り、数キロ先の灌木の林まで出かけ、あるものはキャンプ内の小さなマーケットや町まで買いに行く。このたき木を背負っているのも、やはり婦人と子どもだ。

なぜ、キャンプに女と子どもが目立つのか？

ある若い女性に尋ねた。「だんなさんは、どうしたんだ？」すると「兵隊に行ってる。」と淡々と答えた。「徴兵？私の夫だけじゃなく、みんなそうなんだ。なんとかしようとしたってどうしようもないじゃないか。」とでも言いたげな表情だった。男たちは、徴兵された後、どこかのトレーニング・センターに連れて行かれ、その後、国境の戦場へ送られてゆくという。難民キャンプの婦人は、本人の知らぬうちに、突然、夫を失い未亡人になり、子どもたちは父親を失う。いったんそういう状況に追い込まれると、最初の悲しみ、怒り、悔しさが、あきらめとなり、日常の一部と化してしまうのだろうか。

一度、私たちのチームのソマリア人スタッフが、徴兵にひっかかり、軍に連れて行かれたことがあった。そのとき、私が軍庁でかけあい、彼がJVCの現地スタッフであることを説明すると、ようやく連れ戻すことができたのだった。

難民受け入れ国ソマリアとJVCプロジェクト

救援活動は、受け入れ国と国連機関、民間のボランティア団体の相互の理解、協調の下、難民の人々が望む最善の方法で進められるのが、理想である。しかし、実際には、ソマリアの国内的事情もあり、決してスムーズに進行しているとは言えない。また、それに加えて、遊牧を生活の基盤とし、イスラム教を信仰する難民と私たち日本人とのあまりにかけ離れた文化、厳しい自然環境さえ大きな障壁となった。

JVCは、こうした条件の下、家畜という生活の糧を失ったソマリア難民に対して、農業による自立促進プロジェクトをスタートさせたのだった。

(つづく)

本当に有効な援助とは

田島 誠（ソマリア担当）

▶今年1月15日付の読売新聞「編集手帳」にのったJVCのソマリア・プロジェクト紹介の記事をきっかけに、全国から450万円にもものぼる寄付金が寄せられました。家族で相談して、お母さんは内職のお金から、子供達はコツコツためた貯金や正月のお年玉からと、多くの人達の善意が集まりました。「たきたてのごはんとヤカンの水を持って、アフリカへまっしぐらに走っていきたい気持ち」、「ミルク代の足しにしてください。」と、それぞれの人達の暖かい気持ちが伝わってくるものばかりでした。JVCスタッフ一同に代わりまして、心よりお礼申し上げます。

事務局では、皆さんの気持ちをムダにしないようこのお金を最大限有効に使おうと、検討して来ました結果、現在ソマリアで進行中の「農業による自立促進プロジェクト」に使うことにしました。

新聞では、アフリカが「今世紀最大の干ばつ」とか「飢餓大陸」とか大々的に報道され、心を痛めている人達も多いことでしょう。しかし、その現実に対して、私達はいったい何ができるのでしょうか？アフリカ募金に協力して下さった、あるいは、この問題に関心を寄せている方々に向けて、アフリカの状況と、私達が考えていることを伝えたいと思い、ペンをとりました。

▶ミルクの援助は有効か

日本では、水道の蛇口をひねると、いつでも、どこでも、すぐに衛生的な水を飲むことができますが、地球上で衛生的な飲料水を得られるのは、30%の人達だけだといわれています。残りの70%には、もちろん、ソマリアの人達も入っているのです。新聞や雑誌でやせ細ったアフリカの赤ん坊の写真をみると、誰しも思うのが、「粉ミルクを送ってやりたい」、「食べる物を分けてあげたい」ということでしょう。しかし、考えてみて下さい。生まれて間もない抵抗力のない赤ちゃんに、非衛生的な水で溶いた粉ミルクを飲ませたら、非衛生的な水で洗った（又は、洗っていない）補乳ビンで飲ませたら…。衛生的な水を得るのが難しい上、文盲の母親が多く衛生知識の普及していない国状では、粉ミルクは赤ちゃんにとって栄養源どころか有害なものになります。うすめすぎや雑菌による下痢のため、時には赤ちゃんを殺

す劇薬にさえなってしまうのです。日本でも見直されている様に、赤ちゃんにとっては、母乳が最も望ましい栄養源なのです。その意味では、粉ミルクを送るよりも、母親の健康管理と栄養補給に力を注いだ方がいいのです。

▶食糧援助は必要か

現在、ソマリアには、総人口の6分の1にもあたる70万人の難民が存在すると言われていています。もともとは遊牧民であった彼らですが、戦乱と干ばつのためほとんどの人々が、ラクダ、やぎ、羊、牛といった家畜を失い、現在では、外部(外国)からの食糧援助に頼らざるを得ないのが現状です。難民も含めたソマリア自体が、食糧を自給できる道が開けるまでの食糧援助は必要といえます。しかし、やみくもに食糧を与えるだけでは、彼ら自身の自立心をそなってしまう。食糧援助と平行して進めねばならないのが、将来自立できるための基盤作りなのです。

▶自立への険しい道

外部からの物資援助は、いつまでも続けるには限界があります。ソマリアで必要とされているのは、難民自身が自らの生活を支えて行けるようになることです。それを目標に、現在ソマリア南部を流れるジュバ川、シェベリ川両流域を中心に多くの援助団体が、農場開拓、農業開発をすすめています。JVCの「農業による自立促進プロジェクト」もその一つです。

しかし、克服しなければならない問題が数多くあります。ソマリア国土のほとんどが、乾燥した半砂漠地帯で農業に適した土地は限られています。しかも、日中は40度を越える暑さ、短い雨期（今年も3日しか雨が降らなかった。）、激しい風や竜(たつ)巻による土砂の侵食など厳しい自然条件のため、農業を成功させ、難民の人々が自給の道を見出すことは決して容易ではありません。けれども、何らかの長期的展望が開けない限り、彼らは、また、もとの状態に戻ってしまいます。私達も、ソマリア難民が、再びやせ衰えた姿を新聞紙上にさらすことのないよう努力を続けていきます。援助は、一時的なものではなく、将来を見通して継続してゆくことこそ大切なのです。

「構造難民」

報告 大沼保昭 (東京大学)

難民を生む構造とそれへの対応

植民地から独立した新興国の国民国家としての機能不全が難民を生み、強権政治を大国が支えている / “人道的アプローチ” は対症療法にすぎない / 日本国憲法の平和的生存権の意味

- 今日の難民問題の特徴は、'50～'60年代と異なる。
1. ヨーロッパに限られていた難民が、アジア・アフリカ・ラテンアメリカに多発している。
 2. 解決への方向性は、個別的な枠組みで考えられてきたが、難民条約の規定では、難民の集団的大量流出に対応しきれない。
 3. 難民問題は、革命、東西対立といった政治文脈から主に発生した。国際的保護は非政治的 (apolitical) にならざるを得ず、“人道的アプローチ” は対症療法に終始した。今日の難民の大多数は政治・経済構造に由来する構造難民としてとらえ対処すべきである。
 4. 過去には、難民の困窮は今日ほど厳しくなかったが、現在では難民の受け入れ国もまた貧しい。

難民流出国は、植民地から独立した新興国であるがゆえに、必然的に国民国家として機能不全である場合が多い。文化的・経済的には依然、欧米 (ソ連を含む) の支配から脱け出せない。国内に複数の異質な民族的集団 (エスニック・グループ) を抱えているため、権力を持つ集団による強権政治が起こりやすい。またその強権政体の背後にそれを支える大国がある。いわゆる南北問題を背景としている。

また難民問題は、大量の人口移動としての側面がある。例えば西欧・アメリカへの異民族労働者の定住傾向、日本の歓楽街で働く東南アジア女性なども、より高い生活水準を求めての移動である。

今後の対応として、3つの方向が考えられる。

1. すべて開発の問題として還元していく方向
2. 難民を出している国に対する、国際的な責任の

追求

3. 具体的対策を講じる。(①本国自主帰還 ②第一次庇護国への定住 ③第三国定住)

実際的な対処方法としては、これらを組み合わせ、開発の視点を導入しつつ、流出国の責任も追求していく必要がある。また難民を受け入れ、援助する側は負担の分かち合いが必要である。日本を含めて先進国には植民地支配の事後責任という、歴史的責任がある。

日本国憲法の「平和的生存権」の概念は、難民保護のよりどころとなり得る。これは先進的である。

<討議の内容から>

難民条約にいう難民として個別に認定される場合と、大量の難民が集団で認定される場合がある。ここで、— 運用上、具体的ケースに差違があってはならない。

— 個別に対処すべきだが、認定基準をしぼると門戸を狭める危険がある。

— 西独では、庇護権の認定を希望する人々が殺倒して対応しきれず、難民政策が後退しかけている。

— ひとつの枠組みではムリ。西独型もあってよい。

— 国際的規準より、受け入れた後の国内での人権保護措置を充実させるのが現実的。

以上のやりとりがあった。

また、日本国憲法の平和的生存権は、庇護権 (庇護を求める権利) を認める根拠となり得る。さらに、欧米諸国は“二次的庇護 (一度どこかの国で保護された人が別の国に庇護を求めること)” を認めないが、そこで一次的庇護の内容は何か、などが話題となった。

*難民問題研究グループは5月現在約20名の研究者・法律家で構成され、月に一度研究会を開いている。現在、高野雄一氏 (上智大、国際法) が代表。

REFUGEES

UNHCR

国連難民高等弁務官事務所

広報誌“レフュジーズ(難民)”より

干ばつ、洪水、食糧不足… モザンビークの飢饉深刻

干ばつの被害によるモザンビークの餓死者は20万人とも言われる。4万人以上の人々が難民となって隣国のジンバブエに流出している。

3月16日、モザンビークの政府は、南アフリカ共和国(南ア)と不可侵条約を結ぶにいたった。モザンビークは、人種差別政策をとる南アに対する、黒人解放運動を支援し、難民を受入れてきた。そのため南アから武力攻撃を受けるなど、対立を深めていたのである。妥協を迫られたモザンビークの、せっぱつまった状況に対して、国際社会の迅速な対応が求められている。(編集部)



モザンビーク (撮影:伊藤正孝)

「モザンビークでは、3年間も干ばつが続いた上に、突然サイクロン(暴風雨)が襲い、洪水のために家畜や田畑が流され、多くの人命が失われた。

(食糧不足のため)何千人もの人々が、国際的な援助がとどくインド洋沿岸地域をめざして、移動している。

最も深刻な打撃を受けた地域では、毎月数百人が飢餓のために死亡しており、特に子供達がひどい。」

モザンビークからもどった、ジェラルド=フック氏は、現地の状況を報告した。フック氏は、南部アフリカ各国をまわり、前線の国々に対する南アの侵略行為を調査してきた、ACP-ECC(アフリカ、カリブ、太平洋諸国-欧州経済共同体)の派遣団の長である。

南アやナミビアからの難民を受入れている国々に対する武力攻撃、その他誘拐、脅迫、襲撃などが、この地域ではくり返されている。たとえば、1982年12月レソトの首都マセルでは砲撃によって30人の南アフリカ人と12人の現地人が殺され、1983年5月モザンビークのマプトから10キロのところでは、6人が殺され、40人が負傷している。

モザンビークの首都マプトに近い、モトラやその周辺地域には、400~500人の南アフリカ共和国からの難民がいる。彼らは状況の推移に非常に敏感になっている。南アフリカ政府は、経済的な援助の見返りとして、モザンビーク領内で南アフリカの解放勢力がいっさい活動しないよう要求している。

'83年秋モザンビークの国務大臣は、国内の難民が武装したり、領内を攻撃基地として利用することを認めないという内容の発言をした。そしてその方針に沿って、難民キャンプを、国境から遠く離れたマラクネ(首都マプトの北50キロ)に、新設することになった。

しかしその地域は、サイクロンの被害から立ちなおっておらず、難民の新しいキャンプへの移動は遅れている。傷つけられやすい立場にある難民の運命について、われわれは常に目を光らせていなければならない。

(REFUGEES '84 4月号より 編訳編集部)



(世界年鑑 '84 より)

モザンビーク人民共和国

面積：80万 1,590km²

人口：1,176万人（'81年国連推定）

首都：マプト

言語：公用語はポルトガル語，バントゥー系諸言語ほか

資源：石炭，ボーキサイト，銅，岩塩

主要貿易相手国：南ア，ポルトガル，アメリカ，イギリス

対日輸出：エビ，木材，コーヒー（'81）

1人当り国民所得：332ドル（'75）

歳出予算のうち国防費：29.7%（'82）

政治：75年ポルトガルから独立，社会主義国となる。モザンビークが，南アの黒人解放組織ANCを，南アがモザンビークの反政府組織を支援してきたため両国は緊張関係にあった。

経済：干ばつの影響は全土の3分の1に及び，食糧難が深刻化，鉱工業生産が落ち込み，輸向砂糖生産は82年12万トンと史上最低となり，国際収支は大きな赤字となり経済危機に直面している。

モザンビーク難民 ジンバブエへ流入

1983年9月以来，モザンビーク難民が新たにジンバブエに流入している。2月29日と3月1日，UNHCRの派遣団が新しく難民の報告したジンバブエ北部へ入った。その報告によれば，34,000人が一時的な避難所や木陰に身をよせており，欠乏状態で彼らはひどい栄養失調になっている。ジンバブエの労働・人的資源開発・社会福祉省の技術局が，彼らの正確な人数と，必要な援助を明らかにするため調査中である。

(REFUGEES '84 4月号より)

ジンバブエに逃れたモザンビーク難民に 対する人道的援助計画

'83年末から'84年始めにかけてジンバブエ東部に流入した，約4万4000人のモザンビーク難民に対する援助計画を，ジンバブエ政府が作成した。

難民の多くが危機的な状況にあるため，援助計画の実施は緊急の課題となっている。'84年4月から12月末までの期間に，343万2000ドル（約7億7220万円）が必要とされている。

難民が遠隔地に分散しているため，物資の輸送が困難なので，難民を収容センターに移動して，ここで，食糧・水・保健などの援助を行なう。基本的な食糧はWFP（国連世界食糧計画）から供給される。

政府間，国連機関，民間からの国際的援助は，すべてこの計画に組み込まれ，ジンバブエ政府が調整する。

UNHCRは緊急基金から，この計画のために100万ドル（2億2500万円）を支出した。また，いくつかの政府とEEC（欧州経済共同体）が，各国内の民間団体や国際赤十字連盟を通じて寄付をしている。

JVCプロジェクト

1984年3月31日現在

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
タイ カオイダン (カンボジア 難民)	●技術学校 自転車、牛車、モーターバイク、自動車、水ポンプ、発電機の整備技術を習得する。各3ヶ月、学生数約500名・基本的な技能訓練を通じて、本国帰還あるいは第三国定住していくカンボジア難民(15才以上)の自立を助ける。	UNHCR ロータリー近畿 全国社会福祉協 議会 レフュジー・イン ターナショナル	ソムウェック・ルチャイシット 山西映子 トンディー・ソムカネ 嶋 紀晶, 松本一仁 稲垣三千穂
	●コントラクション 給水 = 近くのダムから既存の配管までの4.5kmに対して給水配管する。 電気 = 夜間の安全のためにキャンプ外周に防犯灯を設置する。	UNHCR	スラボン・パドウンキアティ 永井聖子 バンチャ・ケオルディ パニット・ポティピ 中藤 昭 ソンブンディ・プティナート 松坂 優, 大村 卓
タイ・カンボジア 国境 (カンボジア 難民)	●レントゲン移動診療プロジェクト 移動レントゲン車による、難民村およびタイ被災村の病院への巡回レントゲン診療。 ICRC (赤十字国際委員会) や、海外の医療団体との協力は順調に進行中で、2月からは、タプラヤ郡病院の農村巡回診療のプログラムに参加。	WFP/UNBRO 日本青年会議所 関東東地区、医療 部会 西本願寺 結城青年会議所 城西病院	金子一弘, 林 達雄 サルミエント・ロドリゴ クリアンクライ・プティ ヤビブン スラ・プロムチャン
	●ノンチャン難民村・補助食供給プロジェクト 難民村の栄養失調児, 病人, 妊産婦, 乳幼児とその母親を対象とした補助食供給と栄養教育。 ノンチャン村へは、長時間留まることができないので調理はカオイダンで行なわれ、「ドライ・バック」(水分の少ない食物)として一週間分が現場へ運ばれる。	WFP/UNBRO	大野直樹 (療養のため 一時帰国中) 武田長久 イサラサク・ジャロンウォン ソンチャイ・ジャイピアン 荻野美智子 スニー・サカオラット トンチャイ・クラタルムボン ピアラット・ヴィバスラ モントン
タイ 農村	●給水プロジェクト 東北タイ農村での井戸掘り, 貯水タンクづくり, 及び改良型ポンプの設置。	モラロジーMIRC NTV	木村信夫, 佐藤正喜 ブナム・チャルンブリトゥム カモン・ミンムアン
バナニコム (第三国定住持ち の難民一時収容施 設)	●日本語学校 日本定住希望者のための日本語教育およびオリエンテーション。	天理教 千葉県	佐藤和美, 石丸 寧 鈴木絵里子, スティーブン・ホフマン ティアン・パントゥー
クロントイ (バンコク市内の スラム)	●スラム改善プロジェクト 奨学金援助: スラム児童のための学費援助 図書館: 児童, 成人のための図書館 建材提供: スラム立退き者への物資援助	モラロジーMIRC NTV 庭野平和財団 今井記念基金 JOFIC 一般寄付	タウィチャイ・タムクナノン ソンボン・ブンヤパンチャ 伊藤真理子, 坂場由美子

活動地名	活動内容	出資団体	担当者
カンボジア タケオ	●井戸掘り 地域の診療所，東部・北部農村での井戸掘り。 (機械搬入中)	OXFAM モラロジーMIRC LWS	箕田健一(待機中)
ソマリア (東アフリカ)	●農業プロジェクト マガネイ・キャンプにおけるエチオピアからのソマリア難民に対する農業による自立促進プロジェクト。	UNHCR 一般寄付	柴田久史，税田芳三 山賀望幸，高橋一馬
レバノン (中近東)	●医療ボランティア派遣プロジェクト及び緊急物資援助 レバノンでの被災民(レバノン人とパレスチナ人)に対する医療活動の援助および物資救援。(毛布などの物資援助は，第1回が昨年10月28日，第2回が今年2月4日空路輸送により行われた。)	レフュジー・インターナショナル 一般寄付 (輸送協力:JAL エール・フランス)	竹内俊之 (一時帰国中。プロジェクトは，時期をみて続行の予定。)
人材派遣・養成プロジェクト			
シンガポール	●UNHCR-ホーキンスロード・ベトナム難民キャンプの管理・運営。	日本YMCA同盟 アジアキリスト教会議	ニール・リー
ニカラグア	●ICM-移民受け入れ業務 (ICM と JVC の協約によるボランティア・トレーニング・プログラム。)	ICM, JVC	福村州馬
フィリピン (バター・プロセッシングセンター)	●ICM-難民定住にともなう医療業務 (同上)		竹内敦子
タイ	●マヒドン大学で熱帯医学研修中。	結城青年会議所	林 達雄
日本国内	●日本語家庭教師：定住難民の日本語学習援助 バザー，ハンディクラフト販売 *カオイダン「国境をこえた人々」上映運動 *スタディー・ツアー企画実施 第2回を3月17日から27日までの日程で実施した。参加者6名。	禅林寺 小山工業所 西本願寺(高岡寺青) 一般寄付	槌田 博 森山久寿子 他約30名 関田鶴子 他約20名 鶴田三芳他 熊岡路矢他
東京事務所 (本部)	涉外，事業計画，資金調達，ボランティア調整，会計総務，情報収集および広報等 機関誌「トライアル・アンド・エラー」発行 JVC説明会～毎月第1・第3月曜日 午後6時から9時まで。	全国社会福祉協議会 YMCA 妙心寺 杉並ライオンズクラブ 一般寄付	岩崎駿介(代表) 星野昌子(事務局長) 熊岡路矢，田島 誠 本橋 栄，鶴田三芳 佐々木志保 他約20名 下蘭宏司
タイ バンコク事務所	涉外，事業計画，資金調達，ボランティア調整，会計総務，情報収集および広報，バザー等 季刊「ニュース・レター」(英語・タイ語)発行		高塚政生(バンコク事務所長) 深津高子，石橋節子 ポンピモン・チャイブーン 森本喜久男，勝俣江美 カセム・スクタコ 他約10名

JVCの事業活動とその目的に御理解を

▶JVCとは—Japan International Volunteer Centerは1980年2月、タイのバンコクで設立された民間救援団体です。1979年暮れの、インドシナ難民の大量流出をきっかけに、日本から駆けつけた若者と、現地タイですでに活動を始めていた日本人とが一体となり、現在の組織の原形ができました。JVCは、活動者の自発的な意志に基づき、日本の個人・団体からの寄付金、国連機関からの委託金他によって運営されています。JVCは、人種、国籍、習慣、宗教その他の信条の違いを越えて、難民および同様の窮境にある人々を対象にできる限り継続的な活動を行ないます。

▶JVCの会員募集について—JVCでは、現場の活動を支えるため、その基盤となる会員を広く募集しています。会員には、機関誌『トライアル & エラー』(T/E,月刊)ほか、講演会、バザーなど様々な活動の案内をお送りしています。会員には、下の4通りがあります。

- ・一般会員 10,000円 ・活動者会員 3,000円
- ・団体会員 30,000円 ・学生会員 3,000円

▶『トライアル & エラー』年間購読のご案内

- ・一般購読者 年間 3,000円(1冊送付)
- ・賛助購読者 年間 10,000円(4冊送付)

▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。

- ①会員：東京5-48365 加入者名—JVC会員係
- ②T/E：東京3-54186 加入者名—JVC東京事務所
(住所、氏名、購読開始月をお書き添え下さい。)

▶みなさまの募金が支えるJVCの活動—救援活動をより充実させるため、以下の募金をお願いしています。なお募金の20%をJVCの運営経費に充当させていただいています。

- インドシナ難民救援募金(4月小計 298,230円)タイ国内にある各難民キャンプのプロジェクト費にあてられます。
 - クロントイ・スラム募金(4月小計 261,000円)バンコクのクロントイ・スラム内の図書館の運営およびスラム立退き者のための建築資材購入費に使われます。
 - テック・スラム奨学金(4月小計 39,000円)バンコク市内のスラムの子供達が学校へ通う費用を援助します。
 - アフリカ難民救援募金(4月小計 447,606円)ソマリアでの難民自立促進農業プロジェクト費として使われます。
 - レバノン被災民救援募金(4月小計 44,351円)レバノン被災民に対する医療活動及び物資援助に使われます。
 - 日本語家庭教師募金(4月小計 88,500円)定住難民のための日本語教材費と家庭教師の交通費に使われます。
 - 緊急医療募金(4月小計 103,000円)緊急事態が発生した場合、速やかに医師を派遣したり、医薬品などの緊急救援物資を輸送するために使われます。
 - ボランティア募金(4月小計 101,000円)現場で活動を続けるボランティアの健康管理費にあてられます。
 - JVC運営経費募金(4月小計 331,760円)現場を支えるのに不可欠な事務運営経費、人件費に使われます。
- ▶送金の方法—下記の口座へ郵便振替にてご入金下さい。
東京9-27495(募金種目名をご記入下さい。)

編集後記

▼訂正とおわび

Trial & Error 36号, P. 13, コンストラクションはコンストラクションへ。補助給食プロジェクトは、武田長久が欠落。P. 14, 支援団体の善林寺とあるのは禅林寺へ。スタディー・ツアーの実施は3月17日から19日まで。

Trial & Error 34号, P. 5, 6, 11の坂本銃兵は坂本鉄兵へ。Trial & Error 35号, P. 16~17, ESFはEcoles Sans Frontièresの略, MSFはMédécins Sans Frontièresへ。

以上、訂正しておわびいたします。

▼「現地にいったことのない人たちが、この機関誌を通じて少しでも難民問題や南北問題に関心を持つようになり、何か行動してみたいと感じてくださるのなら、これほど心強いものはない。」本誌初代編集長(創刊号)からの提言である。JVCが、どのような試行錯誤を繰り返してきたのか。是非、バック・ナンバーも読んでいただきたいと思う。

昭和59年5月20日発行(毎月20日発行)

編集人 下蘭 宏司

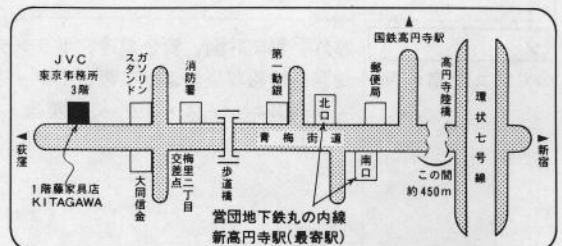
発行人 星野 昌子

発行所 日本国際ボランティアセンター(JVC)東京事務所
〒166 東京都杉並区阿佐谷南1-1-5 安田ビル3F
☎ 03(316)3253

バンコク事務所 Japan International Volunteer
Center, 67 South Sathorn Road
Bangkok, Thailand

☎ (286)4857

印刷所 樹ベスト・プリンティング



定価 送料共200円